

平成24年度 【大学振興会研究奨励補助】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

氏名 吉澤和子

研究期間 平成24年度

研究課題名 東京と周辺地域住民におけるファストフード消費に影響を及ぼす要因及びトランス脂肪酸摂取量

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	吉澤和子	生活科学部	講師
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

米国の大規模コホート研究によれば、トランス脂肪酸の摂取量の増加は心疾患や糖尿病のリスクを上げるとされている。疾病のリスク回避には、世界保健機関(WHO)はトランス脂肪酸の摂取量は総エネルギー摂取量の1%未満に抑えることを推奨している。一方、日本の食品安全委員会の報告では、1人当たりのトランス脂肪酸摂取量の平均は0.3%であり、危険レベルではないとされている。しかし数値は平均値であり、近年、食が多様化してきている日本では、トランス脂肪酸の摂取量は個人差が大きく、WHOの基準値を上回る人が少なからず存在している可能性がある。現在、日本において栄養表示の義務化はない。ファストフードにはトランス脂肪酸含有量が多いと報告されており、多く摂取することは生活習慣病のリスクを上げることにつながる。しかし日本においてはトランス脂肪酸と疾病のリスクについての疫学研究は十分に行われていない。要因の1つに食品分析値のデータベースが不十分なことが挙げられる。本研究は、年齢、性別、職業などの属性によるファストフード消費に影響を及ぼす要因及び1日当たりトランス脂肪酸摂取量を把握することを目的とした。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

研究デザイン 横断研究

調査期間 2011年9月

調査対象者 東京、神奈川、埼玉、千葉に在住する1464人

アンケート調査票の設計 基本的属性、ファストフードの消費行動に関する質問事項及びトランス脂肪酸の含有量が多い食品30項目の頻度と目安量を含む。食品リストは内閣府が開示している情報をもとに、トランス脂肪酸が“比較的多く”含まれる嗜好食品と“多く”含む食品としてファストフード30項目を選択した。調査票はインターネットで配信した。アンケート調査にあたってはインフォームドコンセントを得た。

トランス脂肪酸摂取量の算出 1日当たりの摂取量を求めた。食品100gあたりのトランス脂肪酸量は食品安全委員会が開示している情報を参考にし、これに載っていなかった食品のトラ

ンス脂肪酸含有量は外部の食品分析会社に分析を依頼した。

統計解析 ロジスティック回帰分析、分散分析（有意水準 5%未満）。統計ソフト SPSS

共同研究者 本学生生活科学部公衆栄養学研究室卒業研究生 小松智子、近藤美香

3. 研究成果の概要（600字～800字程度で記述）

プリリミナリーなデータ解析の結果から、①外資系 M 社のファストフードの利用率については、主婦、会社員、学生の割合が他の職業カテゴリーより高く、②全体、男女別、年代別の全てにおいて M 社の製品の消費割合が大半を占めている。③幾つかの要因を用いてロジスティック回帰分析による統計モデリングの結果から、ファストフード店の場所（OR 2.52, 95% CI 1.84 - 3.42）、味（OR 2.40, 95% CI 1.78 - 3.26）が大きな購入理由となっている。トランス脂肪酸の認知状況については「知っている」の割合は、30代で 28.2%、20代で 26.6%、50代で 22.8%であった。

調査対象者全体のトランス脂肪酸摂取量平均値は 1.45g/day、標準偏差 1.56g、最大値 16.11g、最小値 0g となり、変動係数 CV% は 107 となっており変動が大きい。平均値を年代別で比較すると 10代が一番高く（1.56g）、次いで 50代（1.51g）、20代が一番低い（1.39g）となっている。男女別の平均値の比較では差がない（t-検定、 $p=0.926$ ）。職業別では 3つのグループ、主婦、学生、会社員の比較では各々 1.79g、1.47g、1.26g となっており主婦層の摂取量は学生や会社員のそれと比較すると高かった（ANOVA、 $p=0.000$ ）。

本研究の結果における留意する点として、質問票にリストされていない食品も数多くあることから、今回の調査のトランス脂肪酸摂取量は過少評価であるといえる。従って、実際の平均的摂取量はこれより高いことが推測される。同じ食品でもメーカーによりトランス脂肪酸含有量に差があるため正確な値の把握は難しい。また、インターネット調査によるデータのため、バイアスの可能性は避けられない。対象者の総エネルギー摂取量の把握ができないため、総エネルギーに占めるトランス脂肪酸摂取量のエネルギー比は求められない。しかし今後の栄養疫学研究をすすめていく上で重要な基礎資料となる可能性がある。

4. キーワード（本研究のキーワードを 1以上 8以内で記載）

①トランス脂肪酸	②Trans Fatty Acid	③食物摂取頻度調査票	④FFQ
⑤消費行動	⑥Consumer Behavior	⑦ロジスティック回帰分析	⑧Logistic Regression Analysis

5. 研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

本研究の成果は、平成 25 年 4 月米国ボストンで開催される Experimental Biology 2013 で発表することになっている。今後、ロジスティック回帰分析など多変量解析を行い、国際ジャーナルに投稿する予定である。